

# 受験生の手記

映画文学人生論

原作：久米正雄 (1918) 『学生時代』 「黒潮」

参考： 蛍草 (1918) 「時事新報」

破船 (1922) 「婦人の友」

夏目漱石 ころろ (1914) 「朝日新聞」

菊池寛 友と友の間 (1918) 「大阪毎日新聞」

松岡譲 憂鬱な愛人 (1928-31) 「第一書房」

おまえも今年卒業なんだから、しっかりと勉強しろよ。俺も今年こそはしっかりとやるから

久米正雄『受験生の手記』の主人公健吉は一高（第一高等学校）の受験に失敗して、浪人中の若者。三月には弟の健次も中学を卒業し、一高を受験するので、追い越されるおそれもある。今年こそはどうしても合格しなければならぬ。

万全を期して、早めに上京することにした。若松停車場まで見送ってくれた弟に言った。

「おまえも今年卒業なんだから、しっかりと勉強しろよ。僕も今年こそはしっかりとやるから」。弟は黙って頭を下げた。浪人中の不甲斐ない兄に何を云っていいか解らなかつたのだらう。

上京すると、姉の家に下宿させてもらった。その家には義兄の姪の澄子が時々遊びにくる。健吉は澄子が好きになり、いずれは結婚したいという希望を姉に打ち明けた。すると、姉はせめて入学の結果が解って、高等学校へちゃんと入ってからにしろと言った。

しかし、結果は弟が合格したのに、自分は不合格になる。おまけに澄子の気持は弟に傾いていることもわかってしまった。絶望した健吉は猪苗代湖に身を投げ、自殺してしまう。

受験制度の悲劇を描いた古典小説として知られているが、作者の久米正雄は無試験で一高に推薦入学、東大に進学して、芥川龍之介、菊池寛、松岡譲、成瀬正一と第四次「新思潮」を創刊した。



# 受験生の手記

映画文学人生論

したがって、受験に関しては自分自身をモデルにした私小説ではないが、失恋の傷心をこめた心理的リアリズムの小説とはいえるかもしれない。

大正五年十二月、師の夏目漱石が逝去した後、久米は漱石の長女筆子との結婚を望み、いったんは漱石未亡人鏡子の内諾を得ていたが、筆子の気持は松岡譲に傾き、大正七年四月二十五日、築地精養軒で松岡と筆子との結婚披露宴が催された。

『受験生の手記』が「黒潮」に掲載されたのは大正七年三月。さらに、菊池寛が記者をしている「時事新報」に『螢草』が同年三月から九月まで連載された。菊池寛も「中央公論」に『無名作家の日記』を発表する。

これらの「新思潮」同人の動静は野次馬には興味深い。『受験生の手記』と『無名作家の日記』は、若者特有の劣等感、嫉妬、焦燥を誇張して描いて、主人公に対する読者の同情をかうことに成功した点が共通している。

『螢草』は甘ったるいメロドラマで、広く読まれた。新聞雑誌の売上増につながることに注目した菊池も『真珠夫人』などの通俗小説を書きまくる。しかし、菊池も久米も純文学への志のようなものは失わない。「私小説と心境小説」で、久米はトルストイもドストエフスキーも所詮は高級な通俗小説、私小説こそが真の純文学と主張した。

兄よりも禿げて春日に脱ぐ帽子 久米三汀